

〈論文〉

トンガ伝説の中のサモア —オセアニア歴史学における伝説の可能性— Samoa in Tongan Legends: The Potential of Legends in Oceania History

矢野 涼子
YANO Ryoko

Summary

The purpose of this study is to explore the potential of legends in Oceania history. Specifically, the study will organise and analyse the relationship between Tonga and Samoa as told in the legends of the three dynasties that existed in Tonga. It goes without saying that in the study of Oceania, which was an ‘unwritten society’, people’s ‘narratives’ have attracted much attention. In fields such as anthropology and international relations, the ‘narratives’ of Oceania’s peoples have been the focus of attention and consideration. In the field of Oceania history, and particularly in the field of Pacific Island history in Japan, the issue of the ‘narratives’ of these peoples remains a challenge.

This paper seeks to answer the question: what can Oceania historiography (particularly Pacific Island history) reveal by focusing on legends? In history, which is concerned with the historical facts of the past, myths and legends must be tested for their authenticity as historical sources. On the other hand, it will be shown that the treatment of legends can be revealing.

キーワード

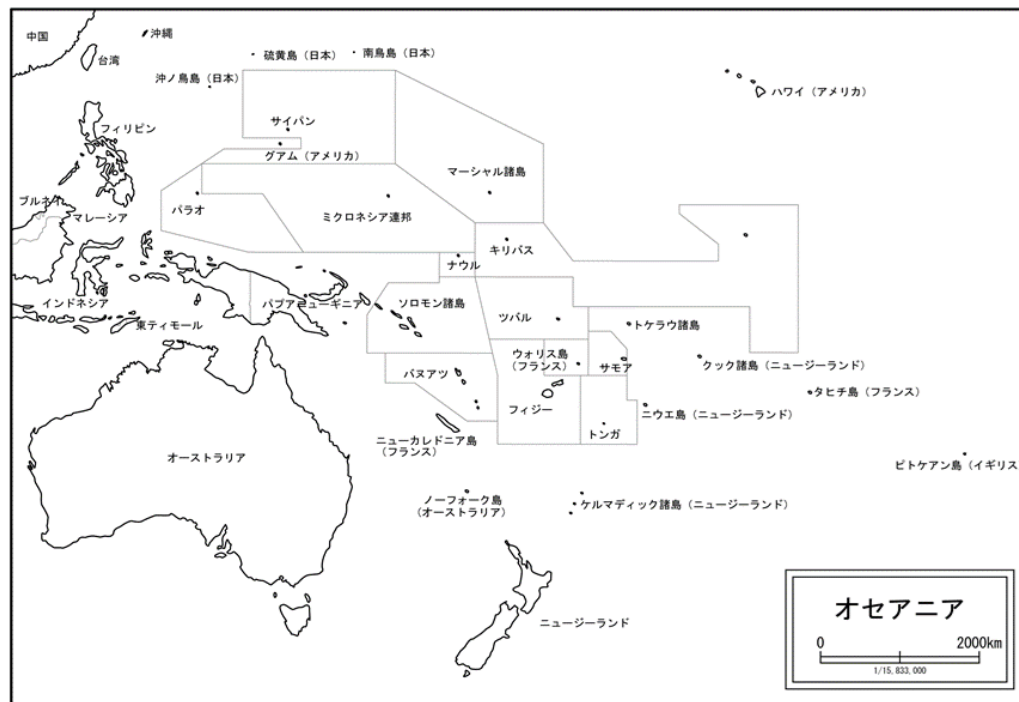
トンガ、サモア、伝説、歴史学、オセアニア

I はじめに

本研究の目的は、トンガに存在した3つの王朝の伝説で語られるトンガとサモアとの関係を整理することにより、オセアニア歴史学における伝説の可能性を考察することである。

まず、本稿で対象とするトンガとサモアの小史を紹介する。トンガ王国（以下、トンガ）は、ニュージーランドから北東に約2,000km、オーストラリアの東に広がる海域にある170以上の島々からなる群島国家である（地図1参照）。地域としては、ポリネシアに属する。1616年にオランダの航海者ウィレム・スハウテンとヤコブ・ルメールがヨーロッパ人として初めてトンガに訪れた。1643年にはアベル・タスマン、1773年から1777年にはジェームズ・クックが訪問したことにより、トンガの存在はヨーロッパに知られることとなった。1797年にイギリスのプロテスタント系ミッションであるロンドン伝道協会（London Missionary Society）が到来し伝道活動を行うが、現地の政治的な対立や文化的な障

壁により、布教活動が進展するには時間がかかった。1820年代にウェズリアン・メソジスト伝道協会（Wesleyan Methodist Missionary Society）の宣教師がトンガに到着し布教活動をしたことにより、トンガはメソジスト教会の信者を多く抱える地域となる。この頃にトンガ人と欧米人の交流は本格化した。10世紀には王朝が存在していたとされるが、現在のトンガ王家に直接繋がるトゥイ・カクノボル王朝のツポウ1世が全土を統一し、即位したのは1845年のことである¹。1890年にトンガはイギリスの保護領となるものの、多くの太平洋諸島が欧米列強の植民地となる中、植民地となることなく独立を維持した。1970年には、イギリスとの保護国関係を解消し、完全に独立を達成した。



地図1：オセアニア地図

サモア諸島は、ハワイとニュージーランドの間、ニュージーランドから約2,900km地点に位置する。地域としてはトンガと同じ、ポリネシアに属する。1830年代にイギリスやアメリカのプロテスタント系ミッションが来島したことからサモア人は本格的に欧米人と交流をもつこととなった。1844年に、ロンドン伝道協会の神学校が設立される。翌1845年には、カトリックのミッションもサモアで布教活動を行うようになった。1860年代には、プランテーションの経営とコブラの貿易を目的として、ドイツの企業もサモアに進出してきた。1899年、サモア諸島は、植民地化の過程で西経171度を境に東西に分割される。西半分はドイツ領、東半分はアメリカ領サモア²となったのである。この頃までには混血も進んでおり、サモアには、サモア人のほか、欧米人、太平洋諸島民、華僑、混血の人々など様々な人々がいたといわれている³。第一次世界大戦でのドイツの敗戦により、1919年、旧ドイツ領サモ

1 須藤健一「トンガ王国の民主化」オセアニア文化事典編集委員会[編]『オセアニア文化事典』2024年、366頁。

2 アメリカの支配下にある非併合領土である。

3 中村綾乃「ドイツ領サモアにおける「人種」と社会層——混合婚をめぐる議論を起点として」田嶋信雄／工藤章[編]『ドイツと東アジア1890-1945』東京大学出版会、2017年、257-259頁、山本真鳥「ジェンダーの境界域——ポリネシ

アは、ニュージーランド国際連盟委任統治領（以下、委任統治領）となった。1947年よりニュージーランド国連信託統治領を経て、1962年に西サモアとして独立し、現在はサモア独立国となっている。

トンガやサモアを含む、多くの太平洋諸島は欧米人との接触を果たすまで、文字が存在しない、いわゆる「無文字社会」であった。「無文字社会」の中で、太平洋諸島民は詩歌や踊りなどの身体表現、文様や絵画など様々な手段で、過去の出来事を伝えてきた。とりわけ、神話や説話、系譜知識等の口碑伝承は過去を知る上で重要な役割を果たすことがある。

サーリンズは、伝説について「史実ではないとしても、なおそれは歴史の真実（詩的論理）」⁴であると述べた。「無文字社会」であったオセアニア地域研究において、人々の「語り」が注目されてきたのは言うまでもない。すべての研究をここであげることは、紙幅の都合上できないが、近年、特に日本で議論をよんだ主な研究をあげておく。保莉は、アボリジニの人々の「語り」に明らかに史実ではないことが含まれていることを指摘した上で、史実ではないことを含む彼らの「語り」に耳を傾けることが重要だとしている⁵。風間・丹羽による編著『記憶と歴史の人類学』は、集合的記憶（国民やエスニック集団を統合する首尾一貫した公的な記憶形態）とヴァナキュラーな記憶（人々の日常生活に根差した矛盾や曖昧さを含む記憶形態）の相互浸透的な関係を見据え、多様な具体的事例から、史実性がいかに現前するのかを検討した。史実性とは「文書の有無にかかわらず、説得性や本当らしさを帯びた実践的な歴史記憶の表現方式と暫定的に想定」されている⁶。片岡は、国際関係論の文脈で集合的記憶の中でも特に社会に定着しやすい記憶として被害者としての記憶に着目し、被害者記憶がいかにフィジーの民族関係に影響を及ぼしてきたのかを「語り」を利用しながら明らかにしている⁷。

このように、人類学や国際関係論などの分野では、オセアニアの人々の「語り」に焦点を当て、考察の対象にしているものの、オセアニア歴史学、特に日本における太平洋諸島史の分野において、こうした人々の「語り」を対象とし考察をしたものは寡聞にして知らない。

そこで、本稿では、トンガに存在した3つの王朝の伝説で語られるトンガとサモアとの関係を整理することにより、オセアニア歴史学（特に島嶼地域を対象とする）は伝説を対象にして、何を明らかにすることができるのかという問いに答えたい。考察の対象に、トンガの伝説を選んだ理由は2つである。1つは、トンガが、太平洋諸島の歴史の中で、かつてポリネシア一帯を支配するほどの影響力があった地域であったためである。もう1つは、サローテ女王（1900～65年）が、トンガの貴重な伝承を収集・保存する機関としてトンガ伝承委員会（Tonga Traditions Committee）を設置したことにより、比較的伝説が収集・整理されているからである。サモアとの関係に注目する理由は、サモアも太平洋諸島の中で比較的影響力がある地域であったと同時に、詳細な分析は別稿に譲ることになるが、関係を扱うことで他島の伝説との整合性が取れば、その伝説の信憑性の高さを判断することができるからである。

詳しくは後述するが、トンガにはトゥイ・トンガ王朝、トゥイ・ハアタカラウア王朝、トゥイ・カ

ア社会の男の女性（マン・ウーマン）」山本真鳥〔編〕『性と文化』法政大学出版局、2004年、189頁。

4 Sahllins, Marshall(1981)Historical Metaphors and Mythical Realities, Ann Arbor: University of Michigan Press, p.10.

5 保莉実『ラディカル・オーラル・ヒストリー——オーストラリア先住民アボリジニの歴史実践——』御茶の水書房、2004年。

6 風間計博／丹羽典生〔編〕『記憶と歴史の人類学——東南アジア・オセアニア島嶼部における戦争・移住・他者接触の経験——』風響社、2024年、13-34頁。

7 片岡真輝「フィジーにおける多人種主義概念の批判的検証——被害者記憶を用いた記憶論的分析」『太平洋諸島研究』11号、2024年、3-17頁。

ノクボル王朝の歴史的に重要な3つの王朝が存在する。それぞれの王朝には伝説が残っており、すでにギフォードやラザーフォード、コロコットらにより収集されている⁸。本稿は、新たな伝説を見出すことが目的ではないため、彼らによって収集され、包括的にまとめられたトンガの伝説研究に依拠をしながら進める。具体的には、彼らによって収集された3つの王朝にまつわる伝説の中から、サモアとの関係を示す箇所を抜き出し整理をする。そこから、伝説の上で、トンガとサモアの関係がいかなるものとして語られているのかを描きだした上で、歴史学において、それらの語りから明らかにできる史実を考察していく。

以下、次のように論を進める。次章では、トンガに存在した3つの王朝の関係を説明する。Ⅲ章では、トンガで最初の王朝とされるトゥイ・トンガ王朝にまつわる伝説においてサモアとの関係がどのように語られているのかを明らかにする。続くⅣ章では、トゥイ・トンガ王朝とトゥイ・ハアタカラウア王朝が併存する二重王権制の時代に、伝説の中で語られるトンガとサモアとの関係を明示する。Ⅴ章では、伝説からトゥイ・カノクボル王朝とサモアの関係を読み解く。Ⅵ章では、歴史学は伝説を対象とし、何を明らかにすることができるのかという問いにオセアニア歴史学の立場（特に島嶼地域を対象とする）から考察を行う。

Ⅱ 3つのトンガ王朝

トンガには、歴史的に重要な3つの王朝が存在する。ここでは、3つの王朝の関係を説明していく。

1つ目は、トゥイ・トンガ王朝 (Tu 'i Tonga dynasty) である。この王朝は紀元950年頃に誕生し、トンガで最初の王朝と言われている。この王朝は、1865年まで続いた⁹。伝承によって差があるものの、最後のトゥイ・トンガであるラウフィリトンガ (Laufikitonga) は、第39～48代目にあたるとされる¹⁰。この王朝は、次に述べるトゥイ・ハアタカラウア王朝が成立するまで、聖的・宗教的職務に加え、世俗的・政治的職務も担った。ただし、この王朝の王は、精神的指導者としての側面が強かったと考えられている。

2つ目は、トゥイ・ハアタカラウア王朝 (Tu 'i Ha 'atakalaua dynasty) である。この王朝は、1470年頃に成立した。トゥイ・トンガ王朝が、第24代目頃¹¹に聖的・宗教的職務以外の世俗的・政治的職務を分担させるために、親族にトゥイ・ハアタカラウア王を名乗らせたことによって始まったとされる。徐々に実質的権力を増大させた王は、自らも王朝を築くことになった。伝承上では、トゥイ・ハアタカラウア王朝の初代君主はトゥイ・ハアタカラウア王朝のモモ (Momo)、またはその息子タカラウア (Takalaua) とされることが多いが詳細は不明である。これ以降トンガでは、トゥイ・トンガ

8 Collocott, E. E. V. (1924) "An Experiment in Tongan History" The Journal of the Polynesian Society, Vol. 33, No. 3(131), pp.166-184, Gifford, E. Winslow (1924) Tongan Myths and Tales, New York: Kraus Reprint, Gifford, E. Winslow (1929) Tongan Society, Honolulu: Bishop Museum, Rutherford, Noel ed. (1977) Friendly Islands: A History of Tonga, Melbourne: Oxford University Press.

9 ギフォードは、トンガにはトゥイ・トンガ王朝以前により古い王朝が存在していた可能性を指摘している。Gifford, Tongan Society, p.49.

10 長戸結未「トンガ」小林泉〔他〕『新版オセアニアを知る事典』平凡社、2010年、403頁。

11 大谷裕文「異人と国家——トンガの場合——」塩田光喜〔編〕『海洋島嶼国家の原像と変貌』アジア経済研究所、1997年、186-187頁。

12 詳しくは後述するが、伝承によって何代目かが若干変わる。

王朝が聖的・宗教的職務を、トゥイ・ハアタカラウア王朝が世俗的・政治的職務を担うこととなった。この王朝は、第16代まで続いた¹³。第16代王が亡くなったのは、18世紀末から19世紀の初頭のことだとされる。

3つ目は、トゥイ・カノクポル王朝 (Tu 'i Kanokupolu dynasty) である。1610年頃に成立した王朝である。トゥイ・ハアタカラウア王朝の第6代タカラウア王が息子にトゥイ・カクノボルをという王位を与え、トンガタプ島の西半分を統治させたことに始まる。これによりトンガには、トゥイ・トンガ王朝、トゥイ・ハアタカラウア王朝、トゥイ・カノクポル王朝の3つの王朝が併存することとなった。のちに、第19代のトゥイ・カノクポル王となるタウファアハウ (Tāufa'āhau) は、ウェズリアン系キリスト教の教えがトンガの平和と近代化に必要だと考え、1834年に洗礼を受け、のちにキリスト教をトンガの国教とした。彼は、首長と平民の両方からの代表で構成する議会を成立させるなど次々に指導力を発揮して戦乱の時代を終結させ、65年にはトゥイ・トンガ王朝を吸収し、併存していた王朝を統一した。この新体制を機に、王名をジョージ・ツポウに改称し、自らツポウ1世を名乗った¹⁴。この王朝が、現在のトンガ王家の系統である。

III トゥイ・トンガ王朝の伝説にみるサモア

ここからは、トゥイ・トンガ王朝にまつわる伝説に現れるサモアを見ていきたい。

ラザーフォードは、トンガの伝説を収拾・保存する機関であるトンガ伝承委員会において中心的な役割を果たしてきたトゥポウ・ポセシ・ファヌア (Tupou Posesi Fanua) とヴェハラ (Hon. Ve'ehala)¹⁵ の両者から聞き取りを行った人物である¹⁶。ラザーフォードによると「神なる王」として有名なトゥイ・トンガの歴代の即位名を語る伝説には様々な異伝があるが、基本的なものは次の2つであるという。1つは、最後のトゥイ・トンガであるラウフィリトンガ (Laufilitonga) の語りをカトリックの宣教師が書き留めたものである。これは、カトリック版と呼ばれている。もう1つは、宣教師のベーカー (Rev. Shirley Baker) が、ラウフィリトンガの娘であるヘピシパ (Hepisipa) と妻であるヴァアレオヴァレ (Veale'ovale) から聞きだしたものであり、ベーカー版と呼ばれている¹⁷。

カトリック版がラウフィリトンガ自身によって語られた「真正な」伝説であること、ベーカー版に出てくるトゥイ・トンガの即位名の多くは、同一人物の変名であると考えられること、ベーカー版にのみ登場するトゥイ・トンガには、事績の伝説が全く存在しないことから、これまで、カトリック版の方が「正本」として支持されてきた¹⁸。ここからは「正本」とされているカトリック版に基づいて歴代のトゥイ・トンガをみていくことにする。

カトリック版には、歴代39人のトゥイ・トンガの即位名が記されている (表1参照)。第1代はアホエイトゥ (' Ahoeitu) であり、コロコットの見解によると、アホエイトゥは西暦950年頃にトンガ

13 長戸「トンガ」403頁。

14 長戸「トンガ」403頁、須藤「トンガ王国の民主化」366頁。

15 トンガの貴族であるが、詳細は不明である。

16 大谷「異人と国家」151頁。

17 Rutherford, Friendly Islands, p.28.

18 大谷「異人と国家」152頁。

の統治を開始した。¹⁹ この統治開始時期については、ギフォードも同じ見解を示している。²⁰ すでに述べたように、最後のトゥイ・トンガはラウフィリトンガであり、彼が亡くなったのは1865年である。つまり、トゥイ・トンガ王朝は、900年程続いた王朝であると考えられる。

表1 カトリック版による歴代トゥイ・トンガ

1	' Ahoeitu	アホエイトゥ
2	Lolofakangalo	ロロファカンガロ
3	Fanga' one' one	ファンガオネオネ
4	Lihau	リハウ
5	Kofutu	コフトゥ
6	Kaloa	カロア
7	Ma' uhau	マウハウ
8	' Apuanea	アプアネア
9	' Afulunga	アフルンガ
10	Momo	モモ
11	Tu' itatui	トゥイタトゥイ
12	Talatama	タラタマ
13	Tu' itonganui Koe Tamatou	トゥイトンガヌイ コエ タマトウ
14	Talaiah' apepe	タライアアペペ
15	Talakaifaiki	タラカイファイキ
16	Talafapite	タラファピテ
17	Tu' itonga Ma' akatoe	トゥイトンガ マアカトエ
18	Tu' itonga Puipui	トゥイトンガ プイプイ
19	Havea I	ハヴェア I
20	Tatafu' eikimeimu' a	タタフエイキメイムア
21	Lomi' aetupu' a	ロミアエトゥプア
22	Havea II	ハヴェア II
23	Takalaua	タカラウア
24	Kau' ulufonua Fekai	カウウルフォヌアフエカイ
25	Vakafuhu	ヴァカフフ
26	Puipufatu	プイプイファトゥ
27	Kau' ulufonua II	カウウルフォヌア II
28	Tapu' osi	タブオシ
29	' Uluakimata I (Tele' a)	ウルアキマタ I (テレア)
30	Fatafehi	ファタフェヒ
31	Tupu' osi II (Kau' ulufonua III)	トゥプオシ II (カウウルフォヌア III)
32	' Uluakimata II	ウルアキマタ II
33	Tu' ipulotu' ilangi Tu' ofefafa	トゥイプロトゥイランギ トゥオフェファファ
34	Fakana' ana' a	ファカナアナア
35	Tu' ipulotu' ilangi Tu' oteau	トゥイプロトゥイランギ トゥオテアウ
36	Paulaho	パウラホ
37	Ma' ulupekotofa	マウルペコトファ
38	Fatafehi Fuanunuiva	ファタフェヒ ファヌヌイヴァ
39	Laufilitonga	ラウフィリトンガ

(Gifford, Tongan Society, p.50、大谷「異人と国家」186-188 頁より筆者作成)

ギフォードによると、トゥイ・トンガ王朝の伝説の中で最初にサモアとの関係が確認できるのは、

19 Collocott, "An Experiment in Tongan History" pp.167-169.

20 Gifford, Tongan Society, p.51.

第10代のモモ (Momo) の治世である。²¹ トンガの伝説の中では、モモは中央トンガタブのトゥイ・ハーメア (Tui Haamea) のロアウ (Loau) の娘であるヌア (Nua) を正妻に選んだ。トゥイ・ハーメアとは、トンガの中で高位の称号であると考えられるが、その実態は不明である。ただし、直訳するとトゥイ (Tui) が王を意味するトンガ語であるため、ハーメア地方の王という意味となる。当時、ロアウと名のつく首長は、トンガに複数いたと考えられており、²² 確実ではないものの、おそらく、モモの時代に活躍したロアウは、ハーメア地方のロアウであると考えられている。²³ 伝説が語るロアウの正式名称は、ロアウ・トゥプトカ (Loau Tuputoka) である。ロアウ・トゥプトカは、モモの時代にサモアのサヴァイイ島 (Savai'i) を訪れ、その際に有名なカメであるサンゴネ (Sangone) を埋めた。²⁴ ポリネシアの神話や伝説では、カメが神聖さの象徴として登場することが多く、神々や精霊と結び付けられたり、航海の守護神として扱われたりする。トゥイ・トンガに関する伝説には、しばしばサンゴネという名前のカメが登場する。伝説が事実ならば、1150年頃、トンガのロアウ・トゥプトカという名前の人物がサモアを訪れていたことになる。

トンガに残るサンゴネについて述べた神話の中には、第10代、第11代トゥイ・トンガについての言及があるとギフォードは述べている。その言及によると、²⁵ 第10代、第11代トゥイ・トンガの時代には、すでにサモアはトンガに支配されていた。²⁶

この支配の結末は、サモアの伝説に現れる。これについては、クレーマーの研究が詳しい。クレーマーによると、²⁷ 第15代トゥイ・トンガのタラカイファイキ (Talakaifaiki) は、サモアの統治者であり、サヴァイイ島のサフォトゥに住んでいた。²⁸ クレーマーは、タラカイファイキは1250年頃の統治者であるとの見解を示している。²⁹ タラカイファイキは、伝説の中では、サモアの有力首長家であるマリエトア家のツナ (Tuna) とファタ (Fata) という人物によって、サモアから追放されたとされる。

ギフォードは、第20代トゥイ・トンガのタタフエイキメIMUMア (Tatafu' eikimeimu' a) についても、サモアとの関係を示す伝説が残っていると述べている。伝説によると、タタフエイキメIMUMアは、ヒナ (Hina) という名の美しいサモア人女性を口説いて失敗した。³⁰

第23代、第24代のトゥイ・トンガについても、ギフォードが伝説から次のことを描いている。1450年頃のトンガを統治していた、第23代トゥイ・トンガのタカラウア (Takalaua) は、トンガタブのラグーンにあるマタアホ島で食事をしているときに殺害された。1470年頃にトンガを統治した、第24代トゥイ・トンガであるカウウルフォヌアフエカイ (Kau' ulufonua Fekai) は、父親であるタカラウアの暗殺者を追跡し、ニウエ、サモア、フツナ、フィジー、ウベアまで遠征をし、暗殺者を捕らえるとともに、³¹ 再びこれらの島々をトンガの支配下においた。カウウルフォヌアフエカイには、少

21 ギフォードは、モモの次のトゥイ・トンガであるトゥイタトゥイ (Tu' itatui) の治世を約1200年頃としている。Gifford, Tongan Society, pp.50-51.

22 Gifford, Tongan Society, p.52.

23 Gifford, Tongan Myths and Tales, pp.49-54.

24 Gifford, Tongan Myths and Tales, pp.45-54.

25 Krämer, Augustin (1902) Die Samoa-Inseln, vol.1, Stuttgart: E. Schweizerbartsche Verlagsbuchhandlung (E. Nägele), S.61.

26 Krämer, Die Samoa-Inseln, vol.1, S.468.

27 Krämer, Die Samoa-Inseln, vol.1, S.468, Ella, S. (1899) "The War of Tonga and Samoa and Origin of the Name Malietoa" The Journal of the Polynesian Society, Vol.8, No. 4(32), pp.231-234.

28 Gifford, Tongan Myths and Tales, pp.55-60.

29 Gifford, Tongan Society, pp.50, 54-55.

なくともタウファイトゥア (Taufaitua) とヴァイヌウラシ (Vainuulasi) という2人のサモア人の妻がいた。³⁰

クレーマーは、第26代トゥイ・トンガのプイプイファトゥ (Puipufatu) は、サモア人とのミックスルーツを持つ王であったとする。おそらく、プイプイファトゥ自身もサモアで結婚をし、彼の娘もサモアで結婚した。第27代トゥイ・トンガであるカウウルフォヌア II 世もミックスルーツを持つとされる。父親は、第24代トゥイ・トンガのカウウルフォヌアフエカイであり、サモア人との妻との間に生まれたようだ。³¹

以上が、トゥイ・トンガ王朝にまつわる伝説に現れる、歴代トゥイ・トンガとサモアとの関係である。伝説が真実であるならば、12世紀の終わりから、トンガとサモアの間には交流があり、1250年前後には、トンガの支配下にサモアがあったことになる。第15代トゥイ・トンガのタラカイファイキの治世の時に、サモアはトンガの支配から解放されるが、1470年頃には再びトンガの支配下に入り、同時期以降のトゥイ・トンガにはサモア人と婚姻関係を結ぶ者もいた。第26代、第27代トゥイ・トンガの治世にサモアがトンガの支配下にあったのかについては解釈によるが、³²伝説は第26代、第27代トゥイ・トンガの治世においてもサモアとの関係があったことを示している。

IV 二重王権制時代のサモアとの関係

II章3つのトンガ王朝で、既に述べたように、伝説上ではトゥイ・ハアタカラウア王朝の時代には、二重王権制が成立していたとされる。第24代トゥイ・トンガであるカウウルフォヌアフエカイが、弟のモウンガモトゥア (mo' ungamotu' a) に世俗的な権力を譲渡した。モウンガモトゥアは、³³トゥイ・ハアタカラウア王朝を開き、政治・軍事的任務を遂行した。これにより、トンガには、神聖な権力を握るトゥイ・トンガ王朝と、世俗的な権力を握るトゥイ・ハアタカラウア王朝の2つの王朝が存在することになったのである。トゥイ・トンガの神聖王は、陸側の王を意味するカウハラウタ (Kauhala'uta) と呼ばれ、トゥイ・ハアタカラウア王朝の世俗王は、海側の王を意味するカウハララロ (Kauhalalalo) と呼ばれたという。³⁴

このように、トゥイ・トンガ王朝とトゥイ・ハアタカラウア王朝が併存するため、トゥイ・トンガ王朝にまつわる伝説とトゥイ・ハアタカラウア王朝にまつわる伝説を明確に区分することは難しい。ただ、この二重王権制の時代には、マタプレ (matapule) と呼ばれる役割を担う人物がおり、このマタプレにまつわる伝説には、サモアとの関係を示すものが存在する。ここからは、マタプレにまつわる伝説に現れるサモアをみていく。

マタプレは、トンガの首長の従者であり、儀式において重要な役割を果たす。³⁵特にカヴァ儀式における役割は重要である。カヴァ (kava) とは、³⁶ポリネシア一帯に広がる儀礼的飲料である。カヴァ儀

30 Gifford, Tongan Society, p.60.

31 Krämer, Die Samoa-Inseln, vol.1, S.187, 296, 468-469.

32 キャンベルは、第26代、第27代トゥイ・トンガは、サモアを支配していたのではなく、追放されてサモアに逃れていたとの見解を示している。Campbell, I.C. (1989) Classical Tongan Kingship, Nuku' alofa: 'Atenesi University.

33 Gifford, Tongan Society, pp.55-56.

34 大谷「異人と国家」154頁。

35 Gifford, Tongan Society, pp.63-71, 156-168, 140.

36 コショウ科に属する灌木の根をくだいて水にひたし、その上澄みを飲む。カヴァは儀礼的飲料であるが、マーケッ

式は、首長の就任のような大規模な儀礼のみならず、コミュニティに訪問者がやってきたときや、村落で会議が行われる場合にも行われる。地域によって儀式の進行方法は違うものの、基本的には、高位の人物から順にカヴァを振る舞われるのがしきたりである。ギフォードによると、王にカヴァを献上することができたのは、マタプレのみであり、仮に首長が王にカヴァを献上したい場合にもマタプレを通す必要があったという。³⁷

さらに、ギフォードは、マタプレには「外国人」が多かったという。³⁸これは、オセアニアに存在するタブー (tapu) という概念が原因だという。タブーとは、日本語のタブーの語源となった言葉であり、禁忌もしくは禁制を意味する。タブーを犯した者は、狩猟・漁労の失敗、病気、近親者の死など、なんらかの超自然的な罰を加えられるとされる。トンガでは、民間人が強大な力を持つ王に直接接触したり、物を献上したりすることは、タブーだとされていた。ところが、このタブーの概念が適応されない者がいた。それはトンガの外の世界から来た「外国人」である。オセアニア一帯の島々では、それぞれの島に特有のタブーが存在する。しかし、島外からきた「外国人」に、その島のタブーを強要すると文化の違いなどからトラブルになることもある。そのため、「外国人」には島のタブーの概念を適応しないと解釈をする島々も多い。トンガも「外国人」には島のタブーの概念を適応しないと解釈した地域の1つである。そのためトンガにおいて「外国人」は、王に直接接触したり、物を献上したりしてもタブーを犯したことにはならないとされた。そこで、マタプレには「外国人」が選ばれたのである。

ギフォードによると、マタプレの多くはサモア人であったという。伝統的に他の太平洋諸島からトンガに移住してくる人々は多くはなかった。ところが、サモアからは平和的移住がなされることがあった。³⁹これは、1600年頃、トゥイ・ハア・タカラウア・モウングトンガ (Tui Haa Takalaua Mounगतonga) と呼ばれる人物が、サモア人の淑女トフイア (Tuhuia) と結婚したことがきっかけである。この結婚を期に、サモア人がトンガに大流入することとなった。⁴⁰こうしたサモア人の中からマタプレの役割を果たすものが出てきたのである。

ここまで、二重王権制の時代のマタプレにまつわる伝説から、サモアとの関係をみてきた。伝説では、1600年頃にトンガへのサモア人の大流入が起こり、流入したサモア人の中には、マタプレとして儀式において重要な役割を果たす者がいたとされる。

V トゥイ・カノクボル王朝の始原としてのサモア

それでは、ここからは3つ目の王朝である、トゥイ・カノクボル王朝にまつわる伝説から、サモアとの関係をみていくことにしよう。

トゥイ・カノクボル王朝が、トゥイ・ハアタカラウア王朝の第6代タカラウア王が息子にトゥイ・カクノボルという王位を与え、トンガタブ島の西半分を統治させたことに始まることは、すでに述べた。1610年頃に成立したものと推定されている。伝説では、このトゥイ・カノクボル王朝の第1代目

トに行くことができ。漢方胃腸薬のような味がし、飲んだ後の清涼感が特徴的である。

37 Gifford, Tongan Society, p.140.

38 トゥイ・ハアタカラウア王朝期のオセアニアに国家の概念があったかは判断がつかないため、括弧付きの外国人とする。

39 Gifford, Tongan Society, p.12.

40 Gifford, Tongan Society, p.141.

の王は、ンガタ (Ngata) という人物であったと語られることが多い。ンガタについての伝説は、語られる地域によって少々内容は違うものの、大まかな話の流れは変わらない。ここでは、ギフォードがトンガのヴァヴァウ諸島で聞き取ってきた伝説を紹介する。

〈ヴァヴァウ諸島ハアキオのダニエル・フォーブラが伝える物語⁴¹〉

トゥイ・ハア・タカラウア・モウンガトンガには、ヴァオロア (Vaoloa)、ハラキタウア (Halakitaaua)、ンガタという3人の息子がいた。ヴァオロアの母親はヌク家 (Nuku) の出身だった。ハラキタウアの母親はニウカプ家 (Niukapu) の出身だった。ンガタの母親はトフィアという女性で、アマというサモアの首長の娘だった。

これらの少年たちが成長すると、トゥイ・ハア・タカラウアは彼らをヒヒフォ (Hihifo)⁴² のアタのところへ送り、彼のためにカヴァを作るように命じた。彼らは最初のカヴァの儀式ではヴァオロアを最高首長として扱った。次の儀式ではハラキタウアを最高首長とし、その結果カヴァは彼のものとなった。3回目のカヴァの儀式では、末っ子のンガタを最高首長にした。少年はとても幼かったので、兄たちにカヴァをもらったのと同じように返すように命じる方法を知らず、ただ黙っていた。もちろん、それ以来カヴァは彼のものとなった。

カヴァの儀式が終わると、3人の少年たちはトゥイ・ハア・タカラウアが滞在するフォナモトゥ (Fonuamotu) に戻った。トゥイ・ハア・タカラウアは、彼のマタプレと遠くから向かってくる3人の少年たちを見て言った。「紳士諸君、これから来るウルトル (Ulu tolu) が見えるだろう。」ウルトルとは3つの頭を意味し、これがトゥイ・カノクボル家とヌク家およびニウカプ家の首長に適用されるウルトルという語の由来である。3人の少年たちはトゥイ・ハア・タカラウアにカヴァの儀式がどのように行われたかを話した。トゥイ・ハア・タカラウアは面白がって言った。「大丈夫だ。ンガタにカヴァをあげよう。彼の母親はこの地のよそ者、サモア人だったから。」

少年たちは大人になった。トゥイ・ハア・タカラウア・モウンガトンガは、ヴァオロアを母親の部族のもとへ送り、その息子はヌク家の首長となった。ハラキタウアは母親の部族のハアパイへ送り、その息子はハアパイのニウカプ家の首長となった。モウンガトンガはンガタをヒヒフォへ送り、その地区の首長に任命した。なぜなら彼はよそ者 (サモア人) の息子だったからである。ンガタは初代トゥイ・カノクボルとなった。

ダニエル・フォーブラが伝える物語によると、後に初代トゥイ・カノクボルは、トンガとサモアの双方にルーツを持つ人物である。異母兄弟の三男であった。物語には、カヴァの儀式についても言及されている。上の兄から順番に、カヴァ儀式の最高首長を務めたが、ンガタの番の時に、若いンガタは儀式が終わった後、誰にカヴァを渡すべきか分からなかったため、自分が持ったままにしまった。その結果、カヴァはンガタのものになった。ンガタは大きくなってから、ヒヒフォの首長となった。その後、初代トゥイ・カノクボルとなったのである。

この物語で、注目すべきことが3つある。1つ目は、現在のトンガ王家の系統に繋がる、トゥイ・カノクボル王朝の起源にサモア人の血が流れているとしていることである。2つ目は、マタプレの流入のきっかけになった出来事は、トゥイ・ハアタカラウア王朝において、トゥイ・ハア・タカラウア・

41 Gifford, Tongan Society, p.140.

42 トンガのニウアトブタブ島にある村。

モウングトンガと呼ばれる人物がサモア人の淑女トフイアと結婚したことであった。ンガタの父と母の名前は、マタプレの流入のきっかけとして伝えられる出来事に登場する人物と一致している。3つ目は、ンガタが最終的にカヴァを持ったままになってしまった理由として、よそ者の息子だからという理由があげられていることである。こうした、複数の地域にルーツを持つ子どもが、当時のトンガにおいてどのような位置づけや扱いにあったかは、はっきりしない。けれども、「外国人」の子どもであるから、カヴァを保有することができたという点は、マタプレの多くが「外国人」でカヴァ儀式において重要な役割を果たしたというトゥイ・ハアタカラウア王朝期の慣例に通じるものがある。

トゥイ・カノクポル王朝にまつわる伝説は、王朝の始まりの王がトンガだけでなく、サモアにもルーツを有していたことを示している。

VI おわりに

ここまで、トゥイ・トンガ王朝、トゥイ・ハアタカラウア王朝、トゥイ・カノクポル王朝にまつわる伝説から、先史時代のトンガとサモアの関係についての言及を整理した。再度ここで、簡潔に伝説から描き出すことのできる、トンガとサモア関係をまとめておこう。

950年頃に、トンガにトゥイ・トンガ王朝が成立した。第10代トゥイ・トンガであるモモがサモア人女性ヌアと結婚したのが、伝説上最初に現れる、サモアとトンガの関係である。この頃のサモアはトゥイ・トンガ王朝の支配下であり、この支配は1250年まで続いたとされる。1470年頃には再びトンガの支配下に入ったとされるが、その支配がいつまでであったかは議論が分かれるところである。第24代トゥイ・トンガの頃に、トンガの王朝は神聖な権力を握るトゥイ・トンガ王朝と、世俗的な権力を握るトゥイ・ハアタカラウア王朝の二重王権制に移行した。1600年頃、トゥイ・ハア・タカラウア・モウングトンガと呼ばれる人物が、サモア人の淑女トフイアと結婚したことをきっかけに、トンガに多くのサモア人が流入した。その中には、マタプレという役職を担う者も出てきた。現在のトンガ王家の系統に繋がる、トゥイ・カノクポル王朝の初代ンガタは、トゥイ・ハア・タカラウア・モウングトンガとトフイアとの間の子だとされる。

それでは、歴史学は伝説を対象とし、何を明らかにすることができるのか、という問いに答えたい。ここまでの伝説から史実として認めることができることは、先史時代のトンガとサモアとの関係について、これまで示したような伝説を語る人々がトンガにはいたということである。自らが暮らす島であるトンガの過去について、上述のような「記憶」を持ち、語った人物がいたということは、間違いない過去の事実である。

また、蓋然性が認められる事実としては、950年頃から1600年まで、支配と被支配の関係は伝説によって異なるものの、先史時代からトンガとサモアとの間で人々の交流があったということである。本稿では、主にトンガの伝説から考察を行ったが、サモアの伝説と突き合わせ、同じ言説が出てきた場合、その出来事の信憑性は高いと言えるであろう。サモアの伝説との整合性については、今後の課題としたい。

1つの島の伝説には、史実も含まれる。ただし、過去の史実を対象とする歴史学において、事実とそうでない物語が含まれる神話や伝説は、史料としては信憑性を注意深く精査しないといけないものと位置付けられる。

その一方で、伝説を扱ったことで見えてきた点も2つある。1つは、950年頃から1600年という、

トンガに文字が存在しなかった頃の島の様子が、不確実ながらも描くことができたことである。もう1つは、伝説を語る人々の存在に焦点が当たったことである。「名もなき人々」の過去を浮かび上がらせることは難しい。伝説を語る人々は、歴史的出来事を中心となる人物だけとは限らない。伝説を対象とすることで、その伝説を語る「名もなき人々」の存在にも焦点を当てることができるといえる。

また、本稿で整理をした伝説は、オセアニア歴史学に新たな課題を突き付けた。それは、トンガ人、サモア人といった、太平洋諸島民のアイデンティティがいつ形成されたか、ということである。「自己」の認識には「他者」との接触が必要であり、歴史学においては、それはしばしば太平洋諸島民と欧米人との接触によって説明をされてきた。しかしながら、トンガの伝説では、サモア人を「外国人」として位置づけており、それが故にタブーを破ることのできる存在として、多数のサモア人がマタプレという役職についている。つまり、トンガ人は、サモア人を「自己」とは異なる「他者」として認識していたのであり、その時期はトンガ人が欧米人と接触する遥か前のことである。太平洋諸島民にとって「他者」との接触がいつのことであるかは、再考の余地があるといえよう。

【謝辞】

本研究は JSPS 科研費 22K20050 による成果の一部である。ここに記して感謝申し上げる。

参考文献

- Campbell, I.C. (1989) *Classical Tongan Kingship*, Nuku'alofa: 'Atenesi University.
- Collocott, E. E. V. (1924) "An Experiment in Tongan History" *The Journal of the Polynesian Society*, Vol. 33, No. 3(131), pp.166-184.
- Ella, S. (1899) "The War of Tonga and Samoa and Origin of the Name Malietoa" *The Journal of the Polynesian Society*, Vol.8, No. 4(32), pp. 231-234.
- Gifford, E. Winslow (1924) *Tongan Myths and Tales*, New York: Kraus Reprint.
- (1929) *Tongan Society*, Honolulu: Bishop Museum.
- Krämer, Augustin (1902) *Die Samoa-Inseln*, vol.1, Stuttgart: E. Schweizerbartsche Verlagsbuchhandlung (E. Nägele).
- Rutherford, Noel ed. (1977) *Friendly Islands: A History of Tonga*, Melbourne: Oxford University Press.
- Sahlins, Marshall (1981) *Historical Metaphors and Mythical Realities*, Ann Arbor: University of Michigan Press.
- ピエール・ノラ『記憶の場——フランス国民意識の文化＝社会史』全3巻、谷川稔[監訳]岩波書店、2002年-2003年。
- 大谷裕文「異人と国家——トンガの場合——」塩田光喜[編]『海洋島嶼国家の原像と変貌』アジア経済研究所、1997年、147-191頁。
- オセアニア文化事典編集委員会[編]『オセアニア文化事典』2024年。
- 風間計博／丹羽典生[編]『記憶と歴史の人類学——東南アジア・オセアニア島嶼部における戦争・移住・他者接触の経験——』風響社、2024年。
- 片岡真輝「フィジーにおける多人種主義概念の批判的検証——被害者記憶を用いた記憶論的分析」『太平洋諸島研究』11号、2024年、3-17頁。
- 長戸結未「トンガ」小林泉[他]『新版オセアニアを知る事典』平凡社、2010年、403-405頁。

中村綾乃「ドイツ領サモアにおける「人種」と社会層——混合婚をめぐる議論を起点として」田嶋信雄／工藤章〔編〕『ドイツと東アジア 1890-1945』東京大学出版会、2017 年、253-299 頁。

保莉実『ラディカル・オーラル・ヒストリー——オーストラリア先住民アボリジニの歴史実践——』御茶の水書房、2004 年。

山本真鳥「ジェンダーの境界域——ポリネシア社会の男の女性（マン・ウーマン）」山本真鳥〔編〕『性と文化』法政大学出版局、2004 年、187-219 頁。